発掘調査の概要

平城宮朝集殿院の調査（平城第399次）

平城第399次調査は、東区朝集殿院における発掘調査です。調査範囲は朝集殿院中央部の北寄りにあたり、朝堂院南門のすぐ南側に「中央区」を、東朝集殿の基壇西側に「拡張区」を設けています。調査面積は約1,100㎡で、2006年１月６日から調査をはじめました。

中央区での調査では、次の知見が得られました。

まず、朝集殿院中央を走る南北道路の東側溝と、西側溝とを検出しました。どちらの道路側溝も、わずかに底の部分をとどめるのみでしたが、ともに調査区を南北に縦断しています。両側溝は互いにちょうど80尺（24m）を隔てており、中軸線を介して対称の位置にあります。

続いて、２条の道路側溝にほぼ平行して並ぶ穴列（仮称・東列と西列）を検出しました。東列は東側溝から約２m西側に、西列は西側溝から約２m東側の位置にあります。穴どうしは不等間隔で並び、一部は重複しています。東列と西列とを較べてみると、穴がほぼ対称位置にあるのがわかりますが、この対称性は必ずしも厳密なものではないようです。これらの穴列は、中央区北側の第265次調査（1996年）や南側の第370次調査（2004年）などでも見つかっており、元日朝賀や外国使節を迎える儀式の際に立てられた旗竿穴であると推定されています。

このほか、調査区北端部で東西溝を１条検出しています。この東西溝は、南北道路の側溝との重複関係から、それらより古いことがわかります。第267次の調査成果によれば、この溝は東へと流れていたことが明らかになっています。

拡張区は昨秋実施された第394次調査区と、今次調査の中央区とを結ぶ東西方向のトレンチです。第394次調査は、主として下層朝集殿（奈良時代前半）の存否を明らかにするためのものでした。その結果、上層の東朝集殿（奈良時代後半）の基壇下に掘立柱建物の痕跡を見出せないことが判明したのですが、この知見が奈良時代前半における朝集殿の不在を示すとはかぎりません。例えば、奈良時代前半の朝集殿が、後半期のそれとは異なる位置にあった可能性も残っています。そこで、今次調査では第394次調査地の東側にトレンチを設け、改めて下層東朝集殿を探すことになりました。現在、鋭意調査を進めている段階です。

（平城宮跡発掘調査部　森川 実）

第399次中央区全景（北東から、手前が東側溝と東穴列）